

(第1章 エピローグ)

それは、「」が小学1年生の時に死んだ大好きな祖母の手紙だった。

(祖母の手紙)(表記はしない)

「」へ

せつかくおたからがあるとおもったのに，こんなものしかはいつてなくてごめんね。でもね，ばあちゃんは「」にげんじつのきびしさをおしえてあげたいの。このせかいではおもうようにうまくいかず，いやなおもいをするときがなんどもあるんだよ。でも，わすれないで。たとえどんなにつらくても，「」がきぼうをうしなわなければ，かならずいいことがあるからね。

ばあちゃんは，もう「」とはいっしょにあそべないけど，いなくなってもかなしまないで。「」がえがおでいてくれたら，「」もおとうさんもおかあさんもしあわせになれるから。「」，きぼうをもっていきなさい。それがばあちゃんとのさいごのやくそくだよ。

(↑手紙終了)

小学1年生の時，突然亡くなった祖母。

本来ならその時，最後の宝探しゲームを行い，祖母からのメッセージを受け取るはずだった。

それが8年という歳月を経て「」に届けられたのだった。

(少し間がある。)

……「」の目から，知らず知らずに雫が流れていた。

「…ばあちゃん…」

「」は祖母の手紙を手に入れた……。

(再度真ん中タンスを調べる)

中には何も入っていなかった。

それでも，目に見えない温もりがある事を「」を感じていた。

[左の部屋] (出口へのドア)(調べる)

「」は、ゆっくりとドアノブに手を近づけていた……。

それは、恐怖を感じているのではない。その先にある希望を手に入れようとする事に勇気をふりしぼっているからである。

ドアノブに手を取り、静かに回した……

(画面が白くなり)

(カチャリという音)

「」は、ドアを開け、そのまま後ろを振り向かずに、家の玄関の扉まで走った!!

扉にたどり着き、足を休める事無く、勢いで扉を開けた。

(カチャリという音)

(白画面 終了)(青空)

……空は優しい日差しが出ていた。恐怖の対象であるはずの外が今の「」には微塵にも感じていなかった。

「」は顔に当たる暖かい日差しをただ静かに浴びていた……。

(画面が黒くなる)

たった1つの思い出がき「」に希望を見つけ、闇から救い出してくれた。

しかし運命は非常で、次の闇が迫っている事を「」はまだ気づいていなかった。

「社会の闇」との対決は、まだ終わりを告げる事は無い。

「」はその迫り来る闇の中で希望を見つける事が出来るのだろうか。

(第1章 終了)